2016年(平成28年)12月15日(木曜日)　読売新聞
(第3種郵便物認可)

漱石 次の100年 7

生と死 不変のテーマ

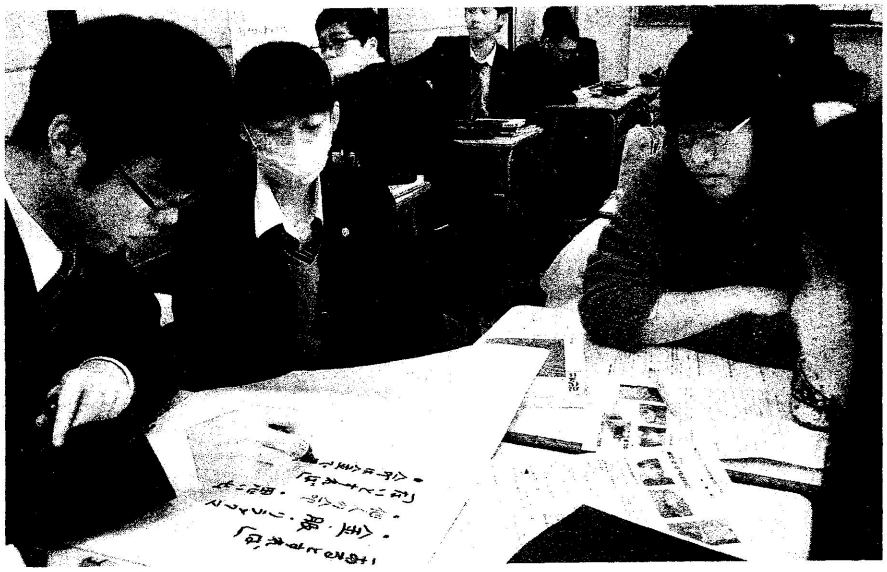
笑い声が飛び交った休み時間がうそのように、生徒たちの表情は真剣だ。都立板橋高校(板橋区)2年7組の現代文の授業で扱うのは、教科書に載っている夏目漱石の代表作「こころ」。教諭の歌川雄介さん(34)は、教室を見渡しながら言った。「今日は生きること、死ぬことがテーマです」

「こころ」では、主人公が出会った「先生」と、その友人「K」の過去の関係が描かれている。Kは自らが理想とする「道」に反し、ある女性に恋心を抱く。同じ女性に恋をした先生は、Kの矛盾を追及し、自殺に追いやる。恋敵を退けて女性を妻とした先生もまた、心の闇を抱えることになる。

歌川さんが、道に殉じたKを題材に生徒たちに考えさせたのは、なぜ自殺をしてはいけないのか――。生徒は4人ほどの組に分かれ、自分たちの考えをボードにペンで書き込んだ。

「大切な人がつらい思いをする」「生きたくても生きられない人に申し訳ない」「親から授かった命だから」

授業を受けた鈴木慶さん(16)は、「現実と理想のあいだで悩むKの姿には共感できる」と打ち明ける。学力や見た目など、周囲との違いばかり気になってしまう。自分に自信がない。



上都立板橋高の「こころ」を扱う授業で、意見を書きだす生徒たち(2日、板橋区で) 下夏目漱石(国立国会図書館蔵)

現代の若者も共感

授業をきっかけに、鈴木さんは一部しか読んでいなかった「こころ」の全編を読んだ。「苦しくても生きなければならない理由を知りたい。答えを求めて、これからも読み返す」と話す。

歌川さんは「何となく生きづらい、生きる意味がわからない。口には出せないで悩んでいる生徒がいる」と、若者たちの心を読み解く。よりよい生き方を求めて葛藤する姿は、漱石が描き続けたモチーフでもある。歌川さんは、授業の狙いをこう語る。「孤独や不安に苦しんでいるのは自分だけじゃないと気づいてほしい。『こころ』を深く読むことは、どう生きるべきかを考えるきっかけになるんです」

＊

漱石の作品はなぜ、現代を生きる若者の心に響くのか。全学年で漱石作品を課題図書にしている新宿区立牛込第一中の3年生、(15)は「作品には100年前に書かれたとは思えないリアリティーがある。『自分が登場人物の立場だったら』と思わず想像してしまう」と話す。

漱石の孫でエッセイストの(81)は「いつの時代も、日本人は『どう生きるべきか』という問いにぶつかってきた。その答えが書かれているから、漱石の作品が読まれ続けるんだと思う」と分析する。

デビュー作「吾輩(わがはい)は猫である」以降、どの作品からも「自然を大切にし、謙虚に、地道に、平和に生きなさい」というメッセージが読み取れるといい、「精神的に豊かな生き方を教えてくれる漱石作品は古くならない」(　　)。

漱石は、未来を見通していたのだろうか。門弟に宛てた書簡に、このような一文を残した。〈功業は百歳の後に価値が定まる。余はわが文を以て百代の後に伝えんと欲するの野心家なり〉。文豪が紡いだ言葉は、100年後の今を生き、悩み、自問し続ける私たちに向けられている。

(おわり)

(この連載は、稲村雄輝、中川慎之介が担当しました)